

第六十九回

〇先生賞候補作品

本年度の〇先生賞選考では、受賞作品のほかに候補作品十七篇が決まった。このうち優秀作品四篇、佳作として八篇をそれぞれ抄出し掲載する。

優秀作品 猫屋敷

白川 ユウコ*

モーツアルトの銅の文鎮そんなものどりに実家に帰りたいくなる夫の手をとくときははずし四十六歳手ぶらで帰る静岡の家
建付けの悪くなりたる玄関の引き戸の右は（へしめきり）の紙
引き戸あけまた引き戸あけ襖あけテレビの前の母にたたいま
おりふしに「わたしは孫がないから」母のつぶやく仏間の狭さ
一軒家娘二人が嫁に行き家をとりにまく猫の一族

孫代わりと母に呼ばれる雄猫がわたし脚をひよると跨ぐ
母さきに去らばさびしむ父ならんやがて猫屋敷と化すならん
父に部屋、母に部屋あり物置と成り果て二人仏間に憩う
父米寿母傘寿なりニッポンの列島各地ゴミ屋敷あり
風呂場の戸をサッシ扉に替えさせた木枠腐つて戸車とれて
一族の血脈を断つわたくしはくるみの切株すべすとす
次に伐るべきは榎か小臭木かみどりの庭がざわざわとする
三畳の納戸の中身八畳の仏間に出せば八畳の山
びろろどが剥けてスポンジ飛び出したピアノの椅子を捨てられぬ父
もつたないもつたないと母親が溜めたる洋菓子紙袋

しまい込むことは大事にすることと違いますがすわなノリタケチャイナ
母の吐く孫という語を片付けるプラスチックのケースに投げる
仏壇はかわいくないなかわいいの買って今のを燃やしたいなあ
春の川みていたわれの乳母車ゴミ袋積み八往復す

納戸には床あらわれて棚あいて猫あやしみて敷居を嗅ぎぬ
マスクとり頭に巻いた手拭はずし昆布のおにぎりを食む
父いつか母いつか去るひとつひとつ小石を積んだこの世を去るよ
讚美歌の楽譜はどこと母が言う行方知れずのままのグロリア

優秀作品 小さな乱気流 椎名 恵 理*

冬眠のごとくおだやかなり銀の GODIVA の缶の中の避妊具
五回分なくなり十回分なくなり排卵検査薬、また買う
後悔は二つあるんだ地下鉄に忘れた傘と無視した手紙
ヘルメットのおおきさの西瓜いれるためヨーグルトには出てもら
一等席あけて西瓜を待つている野菜室に青あらし来る
裏切った人を忘れること勿れ鼻にも頬にも増えゆくほくろ
また鼻のほくろがすこし濃くなった昨日だれかを傷付けたみたい
隔月刊「ビリヤード・キューズ」並びたるレジ横の本棚の黒ずみ

右の台の恋人たちのからかいは喧嘩に変わるキュー拭きながらシヨット音しゅぱんと中夜の天井に響き摩擦の熱の手のひらキューケース提げて二人の帰りみち二文字熟語のしりとり続く早押しボタンないのに押すふりと「ピンポン」必ず言って答える弾く人は家を出ていき主人なきグランドピアノのあしもとの猫母が知る二人と知らぬ幾人に抱かれた身体にクリームをぬる「赤ちゃんがいます」のキーホルダーずつとずつと遠くにある優先席ゆで卵とチェダー詰まつたゆりかごのような揚げたてカレーパン食む椎茸にバツテンつけて鍋に入れ伏せ字のような夕方にいる獐猛な夜なり太刀傷できそうな夏の突風ななめから来る佐渡島に引つ越した友 文通は六往復で止まつたまま猫アレギーのわたしは夏のテラス席で海が嫌いな猫に好かれる戦争を遠く眺めるビリヤード場のスロットマシンのわたし あくる日の予定がある人ない人に依らず命はいくつも消える棺桶の中はここより温いだろう だあれもない陸橋に立つ人間をきれいに抱くため人間の関節は海に向かって曲がる

優秀作品 与力の憤怒 水 辺 あ お

東町奉行所与力平八郎日々目にしたり餓死の骸を
太平の世を支へたる貧農の飢餓、従順の一生ありけり
御上より禄を賜はる身なれども御上にむかふ与力の憤怒
米麦を安く叩いて高く売る豪商の耳、ふくよかな耳
放埒の西町奉行所与力ども両替商から賄賂むさぼる
新將軍宣下祝賀の米出だせお触れ下りぬ飢饉のさなか

米つくりその米食へぬ一農民抱けば嘔きだす与力の憤怒
たびたびの難民救済上申に座してうごかず奉行跡部は
学問は偉いがめつぽふ癩癩もち塾頭怒りて干し魚齧る
大飢饉一揆の農民救ふべく売り尽したり五万の蔵書
開け放つ座敷の向かう朝風にしばし吹かるる石路の花
中夜後夜屋敷の奥の戸を鎖して火薬を製し試し撃ちせり
幕閣の汚職の仕組みあばきたる建議書は成る 決起の前夜
暁の大坂西町奉行所の門敲く弟子、密告の汗
延命か自刃かすでに意は決し上げし額は朝焼けに照る
「救民」の旗幟押し立てて進撃し百目大筒打ち放ちたり
かけつける農民、町民たちまちに七十名が三百余名
淀川を越えて豪商両替商軒を連ぬる船場をめざす
戦などしらぬ民草同心に反撃されて崩れてゆけり
騒果てて義民ら果てて鎮まりて溝に流さる、与力の憤怒
つむじ風さへぎるものなき町々をくまなく照らす白き月光
私心なき滅びはいつも新しきはじまりを生む炎のなかに
思ひきや十五年後の黒船が將軍の世を瓦解させるを
將軍も貧農も消ゆさりながら今に生まるる困窮の人

優秀作品 リモート・リモートワーク 清 水 美 里*

そこにある全ての時計ずれている虹葉局の月曜の朝
コミュ力に自信ないから丁寧を受け応えをすゆつくりおおきく
どうしても褒美がいる退社してグアバジュースを買ってすぐ飲む
穴掘ってまた元どおり埋め戻すみたいな仕事(嫌いではない)

馬駆けるごとキーを打つ指軽く入金伝票八十五枚

五本目のリモート会議の始まりにフシッとあけるリアルゴールドここにいぬ人に叱責されていて電気信号化される謝罪予備のコピー用紙に埃うつすらとペーパーレス化の成功を感じる感じない訓練を積み重ねその重みにふいに足を取られてどん底のやや上空にハンモック吊つて見えます Netflix

体は家心は別の場所にありリモート・リモートワークの時間社会的治癒と治癒との間には日々がとぐるを巻いている 歩く月曜日午後四時そつと抜け出して図書館へ行くクライム・アクションくたくたに葱を煮ている匂いだなすき焼き食べたいあああ夕暮仕事して傷ついたと仕事して治すしかなく今日もはたらくエイドリアン・プロデイの眉眺めると元氣出るのでまた見えています昨日は右今日は左に子の横のあいてるところが私の寝床

注：「できる」には「追い込まれ這いずってなんとかできる」も含んでいます人力でリストアップす「」に奪つてもらえそうな仕事を頑張ったわねと主治医がほほえんだ また頑張つてしまったわねえスプーンを挿せばむちつと手応えのあるプリンまだ寝てはいけなとりあえず子は育つてるアサガオは枯れたし爪は伸びすぎだけどじゃんけんにかけてしぶしぶ家を出る数日ぶりの生の日光
体重のわりにかほそい足のゆび私は私を守つてあげる

佳作 走るころ

三 沢 左 右

鼻先に夏の光をのせて歩く。ひかりのときは今しかなくていつともほり花の名前は知らぬままいつともほりに花を見てゐる

にはかあめレインコートの首を打ち悪事果たししわれと思ひぬ

(間然するところ多し) デジタルの時計の表示いくばくか欠け50円足して選びシラーメンの醤油豚骨うまくなかりきアンケートどう答へても角が立ち自分好みの角を立たせるゆふぐれを検閲したり而今而後ゆふぐれの赤に倦みてしまへり笑ひるしわが失敗を夢のなかわがくりかへす笑ふことなく男性に男性の声ありながら(地声)とふこと思へり葉月われに背を向けて絵を描く君なれば後ろよりさしのべて絵に触る笑ひながら眠りに落つる人のゐて夢とうつつは面で触れあふタップパーが四匹甲羅干ししたる吸水マットに昼の陽の射すびしびしと洗濯物の背を打てば劣情のなき右の掌

長針が短針を追ひ抜かずとき目札くらゐしてをるだらう。さわがしきひまはりの黄のはなびらを抱きとむること日照雨降りくるさらさらとレインコートをふくらめて雨のあがりし町をゆく自転車靴下の穴を糸もてふさぎつつブリティッシュロック聴いてをりたり後輪に百合の花挿し自転車は走るころを失ひてゐるゆびのあと二本分つく小説の装丁黒し海石のごとしはつきりと言ひたきことばわがうちに無ければ酒を咀嚼してゐる汗ばんだ裸足でゆかを歩くとき恋愛映画の後日譚めく熱もちて手のひらすこし太りゆく気のせりきみと手つなぎをれば

佳作 繭なかのつう

奥 呂美生

とほき日のちぶさの記憶よび覚ます初乳のごときかひこ蛾の色穴をあけ絹の繭より出でし蛾の足踏みのごときはばたきを見る

蠟の羽根もてイカロスは飛びたてどおのが翅もつ蚕蛾とべずはねあれど飛べぬ互ひを探しあて卵残さむとする雌雄なり腹太き乳白色のかひこ蛾の産卵終へし後のおごそかきつぱりと短き二期生きぬきし蚕蛾逝きて雨しぶきけり

今朝生れし毛蚕のちひさきその命ひとつひとつがもぞもぞとはふ初夏にひと日休まずさはさはと桑の葉食める蚕時雨たかし桑を食むこの世に生れしものたちの生きゆくためにたつるその音

ある人は〈おかひこ様〉とある人は〈虫〉とよぶこの桑を食むものあらそひのあふるる今をあさなきならそはす食むかひこは桑食む飴色にすぎとほりゆくかひこらは糸吐く時を今と知るらし

熟蚕のかひこのその身美しき絹糸孕むかひこの色のまゆ中に遠き中空あるらむか頭を上げてたびたび仰ぐひたむきなおつうの思ひ重なりかひこの繭とおつうの機と

『夕鶴』のつう思はする繭なかの影はほそりてなほも糸吐く機を織るおつうはその身みするなくかひこは繭に身をかくしゆく繭なかにおのが羽根ぬき機を織るおつうがみえる見える気がする

「のぞいてはなりません」とは言はねどもかひこの繭のひめごとを見ず〈天の虫〉かひこは繭で夢を見る天の夢その夢を見ると言ふまじかなるまゆが宿せしその中にあるやも知れぬセピアの勾玉

夏至の日に言ひやうもなき静けさを残してまゆの昏睡の生

佳作 舅姑の息

印出 美由紀

夫と来て老女三人に道を聞く夫には故郷である午の町
ここ折戸、商船大学跡地に來わか松の辺にまるぶ松かさ

板葺きの官舎の跡に建てられし小さき団地も遺物めきをり折禱書とミシンを持ちて板葺きの官舎にひとり嫁ぎ来し姑鍵束を洒落たりボンで結びし姑よ息のへその緒どこに匿ひぬ駿河湾に大波寄する寒き夜かこの世にきみが宿されけるはをさなき日きみが母この背で聞きし月がゆつくり潮を曳く音古河、清水、江東区、古河 一生を起伏なき地に過ごしけり舅わたしには昔話の翁だつた舅は茶の間の奥に座りて

清水ではまぐろはみなまぐろだと寿司屋のぬしが教へてくれる若き日の舅姑の息のつましきが野ぶだうのごと夜景に灯る舅姑のあとの湯舟にしづもりて宙の深みを思ひゐしころ新婚のわれらを訪ひて発ちぎはにわが肩にふと触れし舅の手わたしたちに生まれざりけるいのちひとつ今天国に舅姑と息ふ棚曇る日本平ゆ見る朝の富士はろばると如来のごとし

受洗せし幼ききみとちちははの蜜月三年小島のやうな
ははの描きし絵に少年は深海をたゆたひてゐる自転車を曳き「聖パウロ」ちちの付けたる名を負ひて息は白髪歴史家となりぬ一枚の新しき紙、古びゆく聖堂に貼られ建て替へを告ぐ「十字架の道行き」たどる在のの人に軽く辞儀して聖堂を去りぬ

佳作 春も失ふ

山崎 洋子

腸閉塞、盲腸、肺炎、腎不全、乳癌もあると医師のたまへりこの世から父抜け母抜け兄抜けてわれも抜けさう花一匁終焉よりわづかにわれを引き戻す重力波なり看護師の笑みはガリバーの巨人となりたる心地せり五本の管に生かされれば

滴下筒チヤンパイの中に落ちゆくぼたぼたを見てゐるだけのにぐわつ如月

ベネチアの仮面ゾンビと錯覚す近づいてくる若き主治医を

恥ぢらひはまた捨てきれぬイケメンの看護師ふたりにわが身洗はる
身勝手な嘘と保身と綺麗ごとわれを因数分解すれば

わが乳房ひとめ見るなり「全摘です」雛祭りの日の眉細き女医

カーテンの揺れる窓から三月の動かぬ空にじつと見らるる

春うらら「まだ」と「もう」とのせめぎあひわれには無縁の桜前線

九時消灯努力なしには眠れない胡蝶の夢は見ないとしても

現実が二割五分ほど混じりゐて目覚めの味は bitter sweet

何もかも電子カルテは知つてゐる秘めたる思ひわれにあること

両腕にふたつの乳房を抱きしめるこの感触を忘れたくない

如月と弥生と卯月と乳房とを、令和四年は春も失ふ

この雨は誰の嘆きかわれよりも深き嘆きの人もゐるのか

人工島は空母のごとくうづくまる黒く雨降る神戸の海に

これからも必ず試験に遭ふだらう四月の雨は夜更けに止んだ

病室の窓に朝焼け届きくるサードエイジはさあ、これからだ

佳作 アフガンの蝶 内藤 丈子

日本海の潮風のなか雪中花香りふるはせ越前に咲く

九頭竜の大河をのぼる桜鱒雪しろ水にいのちきらめく

こんこんと若狭にいのちの水湧きて（お水送り）の春がはじまる

筑紫路へ歌の旅ゆき木守りの朱櫛の香りにしばし憩へり

白秋の生家の壁に水陽炎ゆらゆらのぼるしづかな川辺

柳川の柳にきらめく春の陽にはじけるごとく柳絮うらじよとぶ朝

昆虫を愛でて筑紫の山駆けし少年なりきと中村哲氏

アフガンの蝶に惹かれし哲医師はヒンズークシユへ若き日をゆく

雪が減り砂漠ひろがるアフガンの農地は減りて増える難民

早魃かんばつに泥水飲みて病む民はいのちの水の一滴を待つ

（薬より必要なのは水とパン）中村医師は天の声聞く

金網に石をつめたる（蛇籠じやかご）にて水路築けり医師と民らは

川岸に植ゑし柳の根びつしりと（蛇籠）にからみ堤まもれり

（死の谷）と呼ばれしガンベリ砂漠には小麦畑のひろがる奇跡

（セロ弾きのゴージュ）を愛せし医師なれば胸にいだきけむイハトープを

パミールの雪山をとぶ蝶にのり天に還るや（カカ・ムラド）逝く

中村氏の遺志を継ぎたるベシヤワール会いまもいのちの（水の道）引く

越前の甘藍の葉から紋白蝶いのち光りて風ととび立つ

前の田のからすのえんどう紫の小花ゆらして春耕を待つ

アフガンより伝はりしといふ蕪かたら蒔まきいのちの水を引きし人思ふ

佳作 その下に居る 樋田 由美*

頬なでる風に明日を思い出し歩き出せども三叉路に立つ

「何処にある？此処は大丈夫って場所は？」見覚えのない子供に問われ

空一杯哀しみという魚泳ぎその下に居る 君に会いたい

真っ白い紫陽花を打つ五月雨よ キエフには今砲弾の雨

水槽の中のウツボが僕に言う「腹が減つたな お前を喰うか」

トースターでパンが焼けたらたつぷりとバターを塗って至福の一口

ラジオから誘なうようにラップ来て踊り出してる すべてを忘れ

生きてゆく為には何を知ればいい？知らないほうが生きてゆけるの？

頂上に着くのが少し悲しくて 螺旋階段最後のいちだん
コンビニでスバムむすびとラテを買い 見上げた空は雨が降りそう
掌にひとつふたつの空蟬を転がしながら 今エレベーター
何してる？未来の僕は？何処にいる？君と一緒か？スマホに聞けど
路地裏にずっと住んでる黒猫が喋りかけてる映画のポスター
歩いてる真夏の街を 本当は無関心というブリザードの中
居心地がいいのだろうか 酒持ってピエロが踊る僕の頭蓋で
梶子はいつも優しい夕まぐれ 泣いてもいいか君の前だけ
沙羅の木は人の煩惱知るゆえに麗しく咲く 花落つるまで
ゆつくりと僕は生きてく それでいいそれでいいよとかすみ草笑む
虹色のビー玉ひとつお守りに僕は歩こう この空の下

佳作 五十鈴川の鴨 末広芳子

田の間あひをゆつたりとゆく川の辺に住みなれて早や三十五年
春はさくら、秋は鴨来る（釣川）の流れの岸にけふも来て立つ
梓杉の幹に青苔かへるでんと生ひたりひとりぐらし十年
ゆふだちに濡れて色ます楓が風にこぼせり虹色の玉
母の字を母と敏に見つけたる夜をだんだんと母がふくらむ
わが漬けし瓜の粕漬け陽にすかし翡翠の色とほめくれし母
カーテンに蜘蛛ひとつあて事もなしゆふベミニストローネをつくる
浜木綿の花見たる夜を思ひをり夫と訪ひにし島の星合
たなはたのゆふべをひとり乾杯すスーパードライをグラスに満たし
つつがなき五体たもたん朝あさを青竹踏みをを五分ほどする
八月の六日が来れば読みかへす竹西寛子の『五十鈴川の鴨』

寸の間をそばへ過ぎたり梓杉の幹の右側のみをぬらして
生きるとは受け入れることかたはみが石の割れ目に黄の花咲かす
つつましく、つつしみ深く生きゆかな松葉牡丹にゆふべ水遣る
祖母が持ち母の手を経て今われの翡翠の念珠手になじみ来ぬ
暮れ六つに迎へ火を焚く早足に帰り来るべき夫とおもひて
盆の夜を灯す蜜蠟（あさみどり）炎は直ぐにうつくしく光る
佳作 過ぎてゆく日々 都甲 真紗子

折り折りに脳の箱をひらき見る杳き記憶に心ひたして
「春の海」しらべ明るくひびかせし遺影と並ぶ夫の尺八
古き鍋みがけば少しづつ光りくる忘れぬし傷ありありとして
サ克蘭ボふくらむ頬が染まりをり籠もり居ながく庭に出ぬ間に
樹々のこゑ花々のこゑ目にとどめ庭めぐりきて応へむ今日は
惜しみつつ増えし君子蘭の鉢ゆづるわが無き後も花をひらけと
培ふをやめし裏畑ヨモギ群れ野草も増えてたのしみを生む
肉眼に見えぬウイルス蔓延す名を変へ質を変へ熱暑の日々を
爆撃に避難者つづく列の中幼子がほほゑむ子犬いだきて
春あさき頃より半袖のゼレンスキー氏気概にあふれ説に無駄無し
何用で庭に来しかとうろろす足元にふれし草など抜きて
髪切りし後のすがしき繁りたるハーブの鉢の丈をひくめて
花白きローズマリーの穂をひたすスープが匂ふゆかしその香は
ボルシチに入るるピートの種を播く今年の冬もストープに煮む
過ぎてゆく日々のこの身に恵まれしよろこび捧ぐ夕べの折り
生終へしわれの行く旅たのしまむ先立ちし御霊みたま多く居ませば